

# 紀 要

第 21 号

2008. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

## 織豊期の甲賀

### —甲賀の焼き討ちは無かった—

木戸雅寿

#### 1. はじめに

近江の城の数は1300件を越えるといわれている。その中でも圧倒的に城の数の多い地域が甲賀郡である。おおよそ、その数は全体の18%を越える。その分布は<sup>①</sup>旧甲賀郡全域の大字に対し最低でも一個所として認められる。これを地図にドットしてみると、意外なほどの城の密集度に驚く。こんなにも城が必要なのかと考え込んでしまうくらいである。しかし、ひとつひとつの城の形態は、我々が山城として認識しているような複雑な構造をもつものは少ない。本格的な山城は数えるほどである。形態的に最も中心となるのは、館や敷地を堀や土塁で四角く囲ったものである。これらのことから、甲賀の城を「小規模城館」とか「むらの城」といった言葉で呼び理解される場合が多い。立地は眼下に川や道を望み、往来する人々を監視するような位置、甲賀特有の入りくんだ尾根上の相対するような場所で監視支配地域を取り囲むような小高い丘の上に築かれていることが多い。また、小規模な城が幾つか配置されて、ひとつの群となり機能しているように見受けられる地域もある。それはあたかも在地領の小さな城館が核となりネットワークを組んでいるかのようである。これらのことは、以前<sup>②</sup>に述べたとおりである。現地に行ってみるとよくわかるが、個々の城の姿としては、防御施設としての土塁の幅広はく意外と高い。このことから土塁の機能としてはそれなりに防御性が高いといえるが、一方で城の構造としては、とても戦闘に絶えうるとは考えがたいものが数多く見受けられる。また、館としての視点で見ても、その生活空間は、極度に狭く土塁の高さに屋敷が埋没してしまうくらいのもも多く、とても住むに適しているとはいえないものが多い。

では、これらの城は一体何時、何のために造られたものであろうか。これに対する答えについては、いまだ確固たる論証は行われていないようである。論点として、ひとつには城の縄張り構造論がある。特に、虎口の発展過程からの論では、虎口形態に多様性があり、これらの城が一時期に一斉に作られたものではないとされている。つまり、築城に幾度かの時期画期や進化の過程が見られ、その時々々の要因によって、城の造られた位置や構造が変化してきていると考えられているようである。そのひとつの画期に伊賀惣国一揆による情勢不安を見て、いまひとつに織田信長による近江侵攻をあげている。画期としてこのふたつを想定しているのである。裏を返せば、中世から戦国期におけるこの地域での仮想敵は歴史的に見てこの二つしか想定できないということになる。しかし、これは単に歴史的事象をそ

の画期として当てはめただけのことにすぎないのではないであろうか。築城者側の視点という意味においては、それで全てのことが物語られているのであろうか。これら城の分布やひとつひとつの形態の在り方が、いわゆる惣自治という特異な領地・領主支配を模索し成立させてきた「甲賀武士団」の甲賀特有のスタイルそのものを表しているとするならば、地域支配における彼らの生い立ちや成り立ちや、その発展がそこに内包されていると考えるのが自然である。そういう意味において、甲賀の城の成立を考える上で、惣自治の連繫仕方そのものが鍵を握っているはずである。

ここでは、これらのことを念頭におき、これまで甲賀の城の成立と発展の一つのおおきな要因と考えられてきた織田信長と甲賀武士団の関わりや、織豊政権下での甲賀の位置づけを基本的な時間軸から検討してみたい。このことにより、信長の侵攻が甲賀の城に与えた影響、築城の画期とされてきた外的要因の問題に対する見方について、ひとつの考え方が提示できるものとする。

#### 2. 織田信長と甲賀

ここでは、織田信長が近江に侵攻して以降の信長と甲賀との動向と関わりを検討しながら、当時の信長と甲賀との関わりを見ていきたい。

以前、大和<sup>③</sup>と信長の関わりを検討した時に、信長自身ももっとも早い段階に大和に対して、文書を発給し、接近した相手が松永久秀であることを述べた。それは永禄10年(1567)12月1日のことである。ついで、翌永禄11年(1568)に、信長は柳生に同心することを勧めた。大和に国境を隣接する近江国甲賀での信長の動きは、それに同調するように、それより2年早い永禄8年(1566)に始まっていた。

##### (1) 足利義秋上洛前後の甲賀

永禄8年5月19日(「清水参詣と号し、早々より人数をよせ、則、諸勢殿中へ乱れいる。』『信長公記<sup>④</sup>』卷一)、三好一族は京にいた足利義輝を襲い殺害した。この時、松永久秀により南都興福寺に幽閉されていた弟の義秋は、7月に細川藤孝・和田惟政の手引きにより大和を脱出し甲賀の和田館に逃れた。(「南都潜かに出御ありて、和田伊賀守を御憑みなされ、伊賀・甲賀路を經、江州矢嶋の郷へ御座を移され…』『信長公記』卷一) 戦国大名の覇権争いの中で、次の足利政権を次ぐ可能性のあるひとりであったことが、義秋の大きな存在価値を生んでいたのである。この時に義秋が頼りにしていた戦国大名は、上杉氏・武田氏・六角氏・

朝倉氏・織田氏である。しかし、上杉氏・武田氏からは距離が遠いことを理由に拒否される。そして、三好長逸の追手から逃れるために義秋は武田義統を頼り、近江から若狭へ出てしまった。しかし、武田も当てにはならず、仕方なしに義秋は朝倉氏を頼り、一乗谷へ向かったのである。しかし、頼りの朝倉氏からも上洛の応諾は得ることはできなかった。そして、義秋は最後の頼みの綱、尾張の織田信長を頼ることになる。それは12月5日のことであった。（「高橋義彦氏所蔵文書一」）この時、信長との伝達役を担っていたのが幕府奉公衆の細川藤孝と和田惟政であった。六角貞禎は当初臣下の礼を尽くしていたが、義秋が信長と結託しそうだということを感じ、12月21日に三好長逸と談合し矢嶋同名衆と謀反を起こして、三好方についてしまう。

この流れの中で甲賀が大きな役割をはたしている。義秋の興福寺脱出の手引きに一役買ったのが地域惣中南山六家の中心人物であった和田一族の和田惟政だったからである。そして、和田惟政はこの時の貢献により、この後、義秋の近衆となり城持ち大名（摂津高槻城）にまで出世する。惟政がこの事件により、表舞台にでたのにはそれなりの意味合いがある。既述したとおり<sup>9)</sup>、甲賀武士団の多くは、もともとは古代より、京から近江を経て伊勢国・伊賀国へ抜ける街道とその地域、峠、国境を警固し要人を安全に往来させる「路次警固」役をその主な任務としていたからである。古代から受け継がれたこの役は、室町幕府が崩壊しようとしていたこの時代にも幕府や朝廷の直臣、陪臣、奉公衆という形で脈々と受け継がれていた。甲賀郡の中の安全な道中確保は、もともとから甲賀武士の大切な職務だったのである。もちろん、一方では地域支配の要である守護と結託し、一部の武士の頭領が六角氏との被官契約も結んでいることも事実である。この甲賀地域特有の基盤を利用して義秋は大和から甲賀を抜けて矢嶋へと逃げたのである。そのルートは大和から柳生を抜け伊賀経由倉歴越えで甲賀和田にはいるというルートであった。（図1参照）

大和では柳生一族や伊賀衆（名は記されていないがおそらく伊賀側にもそういう役目の武士がいたものと考えられる。）の力を借りて、和田氏の力（詳述されてはいないが、和田館から矢嶋までの距離とルートを考えると、図に示したようにいくつもの惣中で守られた地域の中を通らなければたどり着けない。和田意外にも、多数の在地領主が介在しなければ不可能なことである。地域惣中の力を利用したと考えることは十分に出来るであろう。）を借りれたからこそ、義秋は脱出できたのである。和田氏の力があったからこそ、和田館を出発した義秋が甲賀武士団の連繋により湖南矢嶋まで安全に通り返ることができたのである。逆に見れば、この事実で義秋が畿内を制圧している三好一族のために木津から京へ入るルートや河内や和泉に出るルートを利用できなかったことも物語っているといえる。つまり、当時の状況としてもっとも安全なルートは、古代から

しっかりとした自治的組織で路次警固がなされていた伊賀・甲賀ルート以外にはなかったのである。

このことは、別の形でもみることができる。それは義秋が信長の後ろ盾を得て一乗谷を出て京へ上洛するときに出された発給文書として確認できる。永禄11年（1568）4月15日、義秋あらため義昭となった義昭は、上洛に際して近江国を通らねばならないことがわかっていた。守護六角氏は義昭を矢嶋から追放後、即座に三好方、つまり反織田側に回っていた。従って幕府としては守護はあてにならず、近江で頼りとなったのは幕府の奉公衆以外になかったのである。その中心が甲賀武士団であった。このことから義秋は、7月28日に多喜、服部、大原の同名中宛に、「郡内路次警固」の命令を出している。また、8月8日には、服部同名中に上洛用の戦列に加わることで道中の斡旋を命令している。（「記録御用所古文書」）現在残っているものはこれだけであるが、おそらくは宛がすべて同名中レベルとなっていることを考えると、この時同時に数多くの甲賀武士団宛に同じ文書が発給されたと考えてもおかしくないであろう。ちなみに、多喜氏は現甲賀市滝に拠点を持ち多喜城を居城とする南山六家の一家である。服部氏は現甲賀市甲南町新治に拠点を持ち服部城を居城とする荘内三家の一家である。さらに、大原氏は現甲賀市大原市場を拠点を持ち大原氏城を居城とする南山六家の一家であった。

つまり、これらのことから甲賀の武士団が、この時足利幕府奉公衆として見なされ、義昭上洛の後ろ盾として働くことを望まれており、義秋が天皇から官位を得ていた戦国武将信長を臣下とらえ彼を頼ったことにより、結果として、彼らが自然と天皇→足利→織田→甲賀武士団という図式に組み込まれてしまったことを示している。しかし、物事はそう簡単、一元的にはいかない。もちろん、地元には近江江南の守護である六角氏の力も存在しているからである。六角氏は守護として甲賀武士団との被官契約を求めている。もちろんそれに甲賀武士団は呼応していたことは、応仁の乱（1467～1477）以後、さまざまな文書で明確に位置づけられているところである。この関係は伊賀から甲賀にかけて、厚く薄く六角氏が滅亡するまで続いている。しかし、この被官制度は緩い力であり、その立場は六角氏が義昭を矢嶋から追い出し、信長が義昭を擁立し上洛を果たそうとした時点で立場が入れ替わりつつあったのである。六角氏に従うか、幕府+織田氏に従うか。彼らにとっては、それはもう猶予のない状態であったに違いない。その結果として信長に恭順するか蹂躪されるかが決まるからである。もちろん、義秋から文書もらったからといって、それに従うかどうかは別問題である。

では、彼らはこれらの命令に従ったのであろうか、従わなかったのであろうか。路次警固という役目を果たしたのであろうか。果たさなかったのであろうか。

それでは、次にこのことを信長方からみてみたい。その

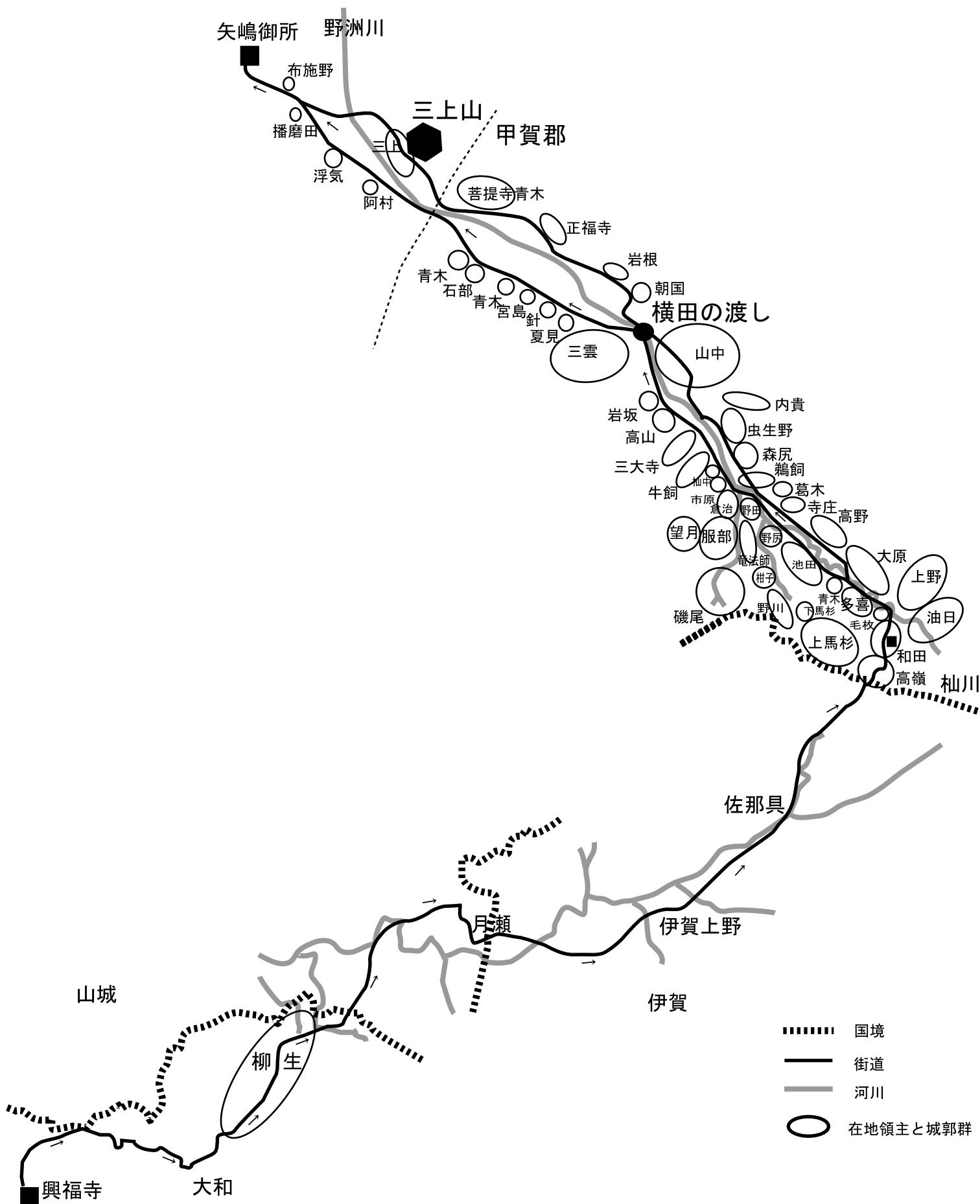


図1 足利義秋 興福寺—矢嶋御所逃走経路（推定）



ことによって、甲賀武士団が足利幕府＋信長側についたのか、三好氏＋六角氏側についたのかが見えてくる。

## (2) 上洛に向けて

六角氏が三好方に付いたことを知った義秋は、すぐに越前の朝倉義景を頼り永禄9年(1566)11月に一乗谷に逃げた。翌10年(1567)になると、三好一族と松永は大和に介入し東大寺を焼き討ちする。このとき信長は、上洛を視野に入れて美濃平定を目指していた時であった。信長はまず、8月15日に井口城を陥落させ岐阜と改め小牧山から居城を移した。9月には近江侵攻をめざして浅井氏と手を結ぶ。そして、11月に正親町天皇と朝廷は足利義栄の征夷大將軍宣下の申請を却下し信長へ綸旨を下している。体制はひとつの方向へ向かおうとしていた。そのような中、信長によって大和に出された発給文書がある。それが12月1日に興福寺(『大和興福寺衆徒宛』)と松永父子のためにその家臣岡氏(『大和岡因幡紙宛朱印状』『岡文書』)にだされたものである。内容は足利義秋「入洛」に近日「供奉」するもので、義昭への忠誠と「入魂」を誓うこと、誓えば「見放」さないことを「誓詞」したものであった。いよいよ信長が動いた。そして、信長は永禄11年4月8日に「近江国甲賀諸侍中宛」(『山中家文書』)に朱印状をだし、義昭の安全を確保した和田氏の労をねぎらった。ついで、6月9日に「近江国甲賀諸侍中宛」(『山中家文書』)に花押を出し多喜氏の功績を褒めた。そのなかには「今般合戦悉切崩、勳手勢候付」とかかれており、この時点ですでに幕府方軍勢として合戦に甲賀衆が赴いていることがわかる。そのことを示すように、6月23日の『多聞院日記二』に三好三人衆が摂津国において甲賀衆300と戦ったことが記されている。これらは柏木三家の筆頭であり、現甲賀市水口町に所在する植城を本拠とする山中氏に残された文書であり、「甲賀諸侍宛」であることを考えると、郡内の中心的役割をはたしていた山中氏から甲賀武士団の同名中に一斉にこの内容が伝達されたものと考えられる。7月16日、義昭は一乗谷から浅井氏の小谷城に移る。そして、7月28日と8月2日に例の路次警固の文書を発給したのである。信長はそれに呼応するように、同8月2日に和田惟政を使者とし、「甲賀諸侍中宛」に「至当国被御座、入洛之儀被仰出候之処、則信長可供奉旨候、雖然江州依難叶通路、来ル五日先於彼国可進発候、先々任請状旨、信長令入魂、此刻各忠節者、可為神妙候…」(『山中文書』『大野与右衛門氏所蔵文書』)と判物を発給した。その内容は上洛に向けて出達するから通路に難儀の無いこと、信長に従い忠節することであった。なお、文書が残された大野氏は甲賀市甲賀町土山大野に拠点を持つ北山九家のうちの一家である。

このように、永禄11年段階ですでに甲賀武士団は足利義昭上洛に呼応する形で信長側に立ったことがこのことである。しかもその勢力は、荘内と南山、北山の地域惣中を中心にしていることがわかる。すでに足利方は甲

賀衆の3/5の地域に力を及ぼそうとしていたのである。残るは三雲地域・信楽地域だけであった。

8月5日に岐阜を發った信長は6日に小谷城に入り義昭と合流する。さらに7日、佐和山城に六角義賢(承禎)を招き所司代を約束する。(『信長公記』卷一)それを聞き三好三人衆(三好長逸・三好政康・岩成友通)は、17日に義賢のもとへ「談合」に向かう。(『言繼卿記』四)いったん、三好方についた六角氏を渡してなるものかということである。名家としての自負のあったであろう六角氏としては成上がり織田氏のその振舞いには許し難い気持ちを持ったに違いない。そのことはその後の行動で理解できる。

そんな中、8月21日に信長より大和に向けて第二の文書が発給された。相手方は『柳生宗巖宛』である。柳生は大和柳生庄の領主で三好長慶の家臣である。松永とも通じる柳生を味方につけることで、大和への足がかりをつくり、伊賀と甲賀から大和への出入り口を押さえたのである。信長も上洛に際しては近江を通過せざる終えないことを理解しており、義秋がたどった道筋を三好勢がたどってくることも逆に想定していたかもしれない。それゆえに、信長にとっても甲賀ルートはぜひでも押さえておかなければならない重要な地域だったのである。また、自らゆくゆく大和の地へ侵攻する時のためにもこのルートは重要な意義を持っていた。さらに武士団勢力として大きな存在であったのが甲賀武士団であった。信長にとっても甲賀武士団の存在が大きなものとして感じていたのは間違いないところであろう。

すべての準備が整った信長は、9月7日に軍を近江に進める。9月11・12日で佐々木六角父子が立てこもる観音寺城と箕作山城を攻める。(『信長公記』卷一)、13日には六角氏を遁走させ難く近江を平定した。(『言繼卿記』四)六角氏は甲賀郡から更に逃れて、応仁の乱以後勢力基盤をのばしていた伊賀音羽郷に逃れた。やはりこの遁走に利用したのが甲賀衆・伊賀衆の路次警固であった。その時に世話になった友田山内宛の貞禎の「路次併種々氣遣共懇意段不可相忘候」(『下友田山内家文書』)という言葉でもよく理解できる。郡中惣は基本的に中立的に郡内を行き交う人々の往來の安全を確保する事がやはり大きな責務だったようである。さて、14日には信長の「出張」に対して綸旨が下された。義昭は信長とともに26日に入京する。27日から勝龍寺城の三好三人衆を攻略し、山城・摂津も義昭・信長の支配下にはいった。久秀は、義昭と信長を礼問し大和一国を安堵される。永禄10年の文書はここで生きたのである。10月18日、義昭は征夷大將軍に補任された。しかし、永禄12年(1569)1月5日、三好三人衆は再び京へ乱入し義昭を襲う。これは三好義繼・池田勝正(甲賀武士と云われている)の活躍により危機を脱した。10日には岐阜にいた久秀も信長に同行し八万の軍隊で上洛する。この頃から義昭の台頭を感じ始めていた信長は、上洛後の14日に十六箇条の

「殿中御掟」を定める。しかし、一方では義昭の生命を守るため「武家御城」の築城も開始している。結果的に信長は、足利家から家紋の二引両と菊文を拝領し臣下となった。これらの使者も和田惟政が執り行っている。

永禄12年段階までのこういう情勢の下で甲賀が幕府の奉公衆として活躍しているということをよく示していて、義昭上洛に与力し六角氏には積極的に与していないことがわかる。永禄12年段階の信長の家臣団構成をみてもこのことはよくわかる。進藤、後藤、蒲生、永原、永田、青地、山岡(山岡氏の本貫地は毛枚城や山岡城を本拠地とする南山、甲賀市甲賀町毛枚である。)などの六角氏配下であった武将をはじめ、甲賀では和田氏を筆頭に、滝川(滝川の本貫地は滝川城を本拠地とする南山現甲賀市甲賀町滝である。)など、文書が発給されている山中や服部、大野、多喜など、この時点で甲賀は足利幕府+信長側にいることがわかる。このような中での甲賀の焼き討ちは考えられないことがわかるであろう。では、なぜ、甲賀焼き討ちという話が現代に語り遺されてきたのであろうか。

それでは、次にそのことを踏まえながら六角氏と信長との対立関係を見ておきたい。

### (3) 反勢力の攻勢、その1—六角氏との戦いの中で—

4月、元号が代わって元亀元年(1570)となる。この年は信長にとって受難の年となる。反信長勢力が一気に火を噴くからである。まず、天皇と将軍の命にそむく朝倉義景を討伐するに4月20日に出陣するが25日に大敗を喫する。それを受け29日に朝倉に呼応する形で浅井氏と六角氏が湖南の一揆とともに挙兵する。さらに再び三好三人衆と本願寺が摂津で挙兵した。信長は這々の体で越前攻めから帰国して陣の立て直しを図る。5月9日、宇佐山城を築城し、永原に本陣を構えた信長は堅田~野洲を結ぶラインで戦線を張る。そんな中、5月19日に六角氏に命じられた甲賀武士杉谷善住房によって千種峠で命を狙われるのである。彼は甲賀の出身である。しかし、このことで甲賀全体が反信長側に回った様相はない。ただし、このことが六角側にも与力しようとする甲賀武士団がいたことを示しているとも理解できる。その筆頭が六角氏が観音寺城を追われた後に彼らをかかっていた菩提寺城・石部城主の青木一族と三雲城の三雲親子であった。彼らはいずれも野洲川横田の渡しよりも南に位置する石部—三雲地域を支配する武将である。彼らは広義の甲賀ではあるが、狭義の甲賀ではない。この地域的差違で甲賀と湖南の入口である野洲川を支配する武士団が六角氏へ与力したため、野洲川橋から横田の渡しまでの湖南と横田の渡しから鈴鹿峠・伊賀国境までの甲賀とは分断されてしまったのである。6月4日、六角親子は三雲定持・成持親子と高野瀬美作守ら旧臣や伊賀・甲賀衆の一揆、併せて約一万の兵を率いて野洲川に兵を進めた。これに対し織田方は柴田勝家・佐久間信盛らをはじめとする兵で迎え撃つ。これが「野洲川の戦」である。し

かし、戦いは一瞬にして織田方の勝利に終わる。『信長公記』にはその時の様子が次のように記されている。「佐々木承禎父子、江州南都所々一揆を催し、野洲川表へ人数を出し、柴田修理・佐久間右衛門懸向ひ、やす川にて足輕に引付け、落窪の郷にて取合ひ、一戦に及び、切崩し、討取頭注文、三雲父子(三雲定持、三雲成持か?ただし、この時に成持は死んではいない。)、高野瀬・水原、伊賀・甲賀衆衆意の侍七百八十討ちとり、江州過半静り。」

### (4) 反勢力の攻勢、その2—延暦寺焼討と足利幕府滅亡、そして本能寺の変まで—

元亀元年6月22日から、信長は裏切られた浅井氏攻めに反攻を始める。そして、6月28日に姉川の合戦で浅井・朝倉軍を破る。ついで8月には摂津・河内で三好三人衆を撃退した。しかし、朝倉軍の反撃により、9月20日に宇佐山城は落ち森可成は討死にする。このことで、信長は24日に延暦寺焼討ちの決意をする。これより10月にかけて比叡山を中心に、浅井・朝倉軍と対峙。信長は我慢しきれずに、11月21日に裏で糸をひいていた六角承禎と和睦を結び兵を引く。この時に、三雲・三上・志賀が信長に降り家臣になってしまう。これで信楽地域以外の主立った甲賀武士団が全て信長側に降りたことになる。しかし、六角氏と信長の和睦は見せかけであった。元亀2年(1571)、8月28日、和田惟政は摂津で大敗を喫する。そして、再び満を持して、9月12日に信長は延暦寺を焼討ちを始めた。元亀3年(1572)、六角義賢・義治が金森一揆と結託。近江各所で一揆が蜂起するがその中に甲賀郡の地名も武将の名も認められない。元亀4年(1573)2月20日、信長、足利義昭の「逆心」に対して全7ヶ条を通達。これにより奉公衆は足利側についた。24日、山岡光浄院を総大将にして「伊賀・甲賀衆を相加へ在城なり」とする。しかし、26日には降参し石山の城を退散。城は「則破棄却」(『信長公記』巻六)。29日、義昭と信長は和睦。4月、鯉江城、百濟寺を焼き討ち。7月16日信長は、槇島城に退く義昭を追撃し足利幕府を滅亡させる。この戦いでも、蒲生、永原、進藤、後藤、永田、山岡、多賀、山崎、小河、青地、京極ら、元佐々木氏重臣の多くと甲賀から池田などが参戦している。池田氏は南山の惣中で竜法師を拠点とする甲賀武士である。7月28日天正と改元。8月28日、浅井氏滅亡。天正2年3月5日甲賀郡の地侍の残党が信長に降伏出頭する。信長は六角父子が籠城する石部城を攻撃するように命ずる(『山中家文書』七)4月13日、「雨夜の紛に、佐々木貞禎甲賀口石部の城退散」(『信長公記』巻七)。これにて、近江の抵抗勢力は一斉されたと考えられる。7月13日から伊勢攻め、8月20日から朝倉氏攻めを開始する。天正3年5月21日、武田攻め。天正4年(1570)、安土城が築城され、天正7年(1580)に天主が完成。5月に信長が移徙。その安土で8月6日に甲賀の伴正林が召し出され相撲をとる。伴氏は山中氏と同じ柏木三家のうちの一家である。9月17日から第

一次伊賀の乱。天正8年(1581)5月17日、甲賀谷中より相撲取り三十人を召し寄せ安土で相撲を催す。6月24日、麻生(蒲生麻生氏)三五郎、蒲生忠三郎、大野弥五郎(甲賀大野氏)を召し安土で相撲を催す。天正9年(1581)2月28日、馬揃えが行われる。各衆から多数の参加があったがこの中に甲賀衆は認められない。9月3日からは第二次伊賀の乱が勃発。甲賀衆は「御先手の次第」として「甲賀口」を織田信雄と滝川一益や蒲生賢秀、丹羽長秀、京極高次、多賀常則、山崎秀家、阿閉貞征とともに守っているからであろう。また、「信楽口」には堀秀政、永田正貞、進藤賢盛、池田秀雄、青地茂綱、山岡景隆、不破直光、丸岡民部少輔、青木玄蕃允とともに、信楽からは地頭職の多羅尾光太が参戦している。これらのことから、天正9年以前の段階で、信楽地域を含めた甲賀郡全域が織田方に降りていることが確認できる。この戦いの功績からか、天正10年(1576)、1月1日の天主のお披露目会に御馬廻衆とともに甲賀衆は御白州に召されて殿中見学にも呼ばれている。(『信長公記』十四・十五)

以上のように、甲賀武士団と信長との接触は早くから行われており、各地域惣中のなかでも核となる有力武士を中心に次々と関係を結んでいることがわかる。甲賀と織田方との軋轢のひとつは六角氏とのつながりを強く持つ武士との問題だけである。その結果として、特に湖南近くの石部青木氏や三雲氏がその筆頭としてあげられ、地域的小競り合いや反目する一部一揆と結託した者達との戦いもあったようであるが、それは小規模なもので目立った戦乱もなく瞬時に制圧されている。もっとも大きかった石部城や野洲川でも局地的戦闘でしかなく、その戦線が甲賀全域に拡大し、信長から甲賀郡が全面的な戦地となり焼き討ちを受けたなどという形跡や記録は全くないのである。

むしろ、甲賀地域は信長の政策により恭順的に支配体制に組み込まれていったと考える方が妥当といえるであろう。

#### (5) 世に言う甲賀焼き討ちを問う

このように歴史的には、永禄8年段階から、甲賀武士団と足利幕府+織田信長の接触と絆は強く大きく存在していることがわかった。記録で甲賀の諸城を舞台とした大きな戦闘が無かったことは明白である。それでは、織田信長に悉く焼き討ちされたという言い伝えはどこから生まれたのであろうか。ちなみに、甲賀郡史の寺社の歴史を簡単に記した一覧をみるとうなずけるところがある。そこには悉く判で押したように信長によって堂宇が焼き払われて中興したということが記されているからである。それを一覧にしたのが表1と表2である。これらの言い伝えではその数が多いように思えた。しかし、実際は当時存在していたであろう寺社全体の総数から見ると三雲地域28%、柏木地区17%、荘内地区6%、南山地区4%、北山地区4%、信楽地区2%と各惣中地域ともその数は圧倒的に少ないのであ

る。特に城郭が密集している荘内、南山、北山地区での数値が湖南と地域と逆転していることから歴史的実がこの数値を裏付けていることがわかる。つまり、この数値は少なくとも「悉く」ではなかったということを示しているのである。では、敵対していた浄土宗や日蓮宗、天台宗だけがねらい打ちをうけたかという、それもデータからはそうではないことがわかる。宗派別に見ても、焼き討ちの言い伝えは、まんべんなく宗派を越えて傳承されていることがわかる。さらにおもしろいのは、城郭の位置関係と焼き討ちされたといわれている寺院の位置とが一致しないことである。なぜ、城は攻撃を受けずに寺社だけが攻撃を受けたのであろうかというような疑問が残るのである。唯一、戦闘記録と城と焼き討ちされた寺院が一致しそうなのが、六角父子が逃げ込み隠れていた青木氏の居城石部城と菩提寺城である。特<sup>⑥</sup>に石部の長寿寺からは三重の塔が信長により略奪され、安土城總見寺に移築されていることも棟札や礎石配置、使用瓦から判明しているので、記録にある天正2年3月5日~4月13日の攻撃の記録は間違いがないであろう。ただ、焼け残ったのが三重の塔だけなのか、実はこれもまた言い伝えであるのかは釈然としない。それでは城の方はどうであろうか。甲賀地域での城の発掘はまだ少ない。現在知り得る城の調査から焼き討ちの痕跡が認められるのかどうかをみてみたい。

#### 例1：夏見城遺跡<sup>⑥</sup>

夏見城遺跡は現湖南市夏見に所在する夏見氏の平地複郭城館である。その存在は、『滋賀県中世城郭分布調査』にも報告されているが、現地では低く囲う土塁状の高まりが認められるが、城郭としての認識は低いものであった。平成19年には場整備の工事に伴って発掘調査が実施されたところ。郭とおぼしき最前に削平された土塁痕と堀が発見された。堀からは15世紀~16世紀の土器が発見され、金メッキされた毛抜きが発見されている。また、堀の外から旧東海道間での間で、石組み井戸4基を伴う溝で区画された屋敷地が発見された。ここでの調査では、城が焼けた痕跡は認められていない。

#### 例2：植城遺跡<sup>⑦</sup>

植城遺跡は現甲賀市水口町植に所在する山中氏の平地複郭城館である。その存在は、『滋賀県中世城郭分布調査』にも報告されているが、現地では長方形の屋敷地を高い堀と土塁で囲う城郭として現況でも認められる。平成17年度には場整備に伴う道路工事に伴う発掘調査が実施された。ここでは、堀と土塁、屋敷地の発掘が実施されたが、焼けた痕跡は認められていない。

#### 例3：竜法師城遺跡<sup>⑧</sup>

竜法師城は現甲賀市甲南町竜法師に存在する城である。城の縄張りからは山城ではなく、見張り台のような役目を果たしていたのではないかと考えられている。いわゆる、手端の城である。平成17年度に第二名神関連ので発掘調査



地域大字	所屬在地領主名	天台宗		真言宗		浄土宗		真宗		臨濟宗		曹洞宗		日蓮宗		黄檗宗		弘明寺		神社		廃寺		總數	伝承比率	
		A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B			
石部	● 石部	3	2	0	0	1	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	3	0	0	13	53%	
	小計	3	2	0	0	1	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	3	0	0	13	53%		
	● 青木	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	6	0%	
	△ 宮島	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	6	0%	
	△ 針	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	5	0%	
	△ 夏屋	1	1	0	0	3	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	7	86%	
	◎ 吉永・三雲	1	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	6	0%	
	△ 嘉徳寺	0	0	0	0	1	1	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	5	48%	
	◎ 正福寺	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	0	4	25%	
	△ 岩根	1	0	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	5	20%	
	△ 朝國	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2	50%	
	△ 下田	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0%	
	小計	4	1	0	0	15	5	9	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	11	3	6	3	47	132%	
	◎ 伴	1	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	0	3	0	10	0%	
	△ 八田	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0%	
	◎ 中山	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	3	33%	
	△ 上山	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	2	6	33%	
	△ 塚	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0%	
	△ ？	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	100%	
	◎ 榎・北脇・宇田	0	0	0	0	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	1	0	0	11	218%	
	△ 新城	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	1	1	4	25%	
	△ 水口	3	1	0	0	6	0	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	5	1	0	19	316%	
	小計	6	2	0	0	20	1	5	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	5	1	15	2	6	3	58	1017%
	賢木・森尻	△ ？	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	4	50%	
	△ 葛木	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0%	
	△ 寺庄	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	5	0%	
	虫生野・深川	◎ 鶴岡・福島	1	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	3	0	0	9	0%	
	△ 内貴	△ 内貴	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0	7	14%	
	岩阪	△ 衛藤・篠原	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0%	
	高山	◎ 高山	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0%	
	三大寺	◎ (寺)	※1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	5	240%	
	牛飼	△ ？	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	5	0%	
	柱内	△ ？	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0%	
	△ 柳中	△ ？	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	4	0%	
	△ 山上	△ 山上	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	4	0%	
	△ 杉谷	△ 杉谷	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	4	0%	
	塩野	△ 福島	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	6	0%	
	新治	◎ 服部・倉治	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	0	6	0%	
	柱子・機尾	△ 望月	6	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	0	13	0%	
	野田	△ 野田	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0%	
	壹法師	△ 櫻庭	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	4	0%	
	野尻	△ ？	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0%	
	小計	17	0	2	0	23	1	1	0	0	2	0	0	0	1	0	0	8	0	24	2	7	2	86	56%	





がなされ、堀、土塁、郭痕と祭祀土壌が発見されたが、焼けた痕跡は認められなかった。

#### 例4：高野城遺跡<sup>9)</sup>

高野城遺跡は現甲賀市甲賀町高野に所在する高野氏の居城である。その存在は、『滋賀県中世城郭分布調査』にも報告されている。平成16～18年度に、第二名神関連工事に伴って、発掘調査が実施されたが、山の尾根沿いに、人為開削されたおおくの平坦地や堀状の遺構が認められたが、山城として機能するような施設としては完成したものではなかった。急場しのぎに、工事が行われたことは確かであるが、高野氏の城としては戦闘を目的とする処まで至っていないことがわかった。

#### 例5：上野城遺跡<sup>10)</sup>

上野城遺跡は甲賀市甲賀町油日に所在する上野氏の居城である。丘陵上に大規模に作られた山城である。その存在は、『滋賀県中世城郭分布調査』にも報告されている。昭和63年に県道新設工事によって郭の一部が発掘調査された。平坦地から建物の跡が発見されたが、焼けた痕跡は認められなかった。

#### 例6：小川城遺跡<sup>11)</sup>

小川城遺跡は甲賀市信楽町小川に所在する山城で、調査の結果山頂で井戸や礎石立建物跡が発見され、16世紀後半中国製磁器や国産陶器が発見されたが焼亡の痕跡はなかった。

このように、甲賀郡域の発掘調査の件数は少ないが、いずれの調査でも、戦闘を実施した痕跡は認められていない。城自身が江戸期を経て現代まで、ほぼ完全な姿で村の中で受け継がれ破却すらうけていない事から考えれば、信長方からすれば、城の存在、ひいては甲賀武士団の存在そのものも眼中にない、脅威では無かったか、もしくは、信長によりすでに安堵されていたかのどちらかといえるであろう。

以上のような事から考えると、はたしてこれら「焼き討ち」という言葉に代表される戦闘行為、定説は、史実か、後の過大宣伝なのであろうか。いずれ、発掘調査が進めばよりこの事実は鮮明になるとは考えられるが、ここでは織田軍による甲賀の焼き討ちは限りなく無かった。仮にあったとしてもまったく局地的で小規模なものだけであったと位置づけておきたい。

#### (6) 信長の死とともに、生き残りをかけて「神君伊賀甲賀越え」

天正10年(1576)、武田軍を滅ぼした信長は、富士見を行い安土に凱旋した。かわって、徳川家康が戦勝の労をねぎらうために、5月15日の安土の饗宴に迎えられた。19日、家康は安土總見寺にて能を見る。20日、信長と面会。21日、京へと発った。29日、信長は安土城の留守居に津田源十郎(織田信益)以下、6人の者に本丸の守備を行わせた。また、二の丸には蒲生賢秀以下、木村重章(蒲生桜川)、

雲林院氏、鳴海氏、祖父江氏、佐久間氏、箕浦氏(米原市近江町)、福田氏、千福氏、松本氏、丸毛氏、前波氏、山岡氏(瀬田)等とともに鶴飼氏(荘内三家の一家で、現甲賀市甲南町にある深川城を居城とする甲賀武士である。)の名が見える。そして、6月1日、本能寺の変が起こる。明智光秀の軍勢に攻められた信長は、数少ない小姓衆とともに奮戦したが、その短い生涯を閉じた。この時の討ち死にした小姓の中には、先に安土で相撲をとった伴太郎左衛門、伴正林やの甲賀武士の名も多く見える。また、信忠についていた服部小藤太、服部六兵衛も二条城でその命を落としている。そして、家康は滞在していた堺から伊賀衆と甲賀衆の力を借りて伊賀～甲賀を抜け、伊勢から船に乗り三河に逃げた。やはり路次警固は伊賀衆と甲賀衆の得意とする仕事であったことがわかる。

### 3. 豊臣秀吉と甲賀

#### (1) 惣自治の解体

さて、信長亡き後、政権を握ったのは秀吉である。近江は信長の領地として当初織田家に安堵されるが、後に、秀吉による直轄地とともに分断されてしまう。文献等の記録によると、甲賀郡の惣自治がもっとも結束力を増したのは、むしろこの時代ではないかという報告もある。いずれにしても、信長自身が解体せずに取り込み利用していた甲賀武士団は、秀吉も当初は積極的な解体はせずに利用していた。最終的に、甲賀郡の惣自治が解体されるのは、秀吉の勘気を被ってからである。それは、天正13年(1585)の紀伊雑賀攻めによる、いわゆる「甲賀破儀」による。川堤の普請のまずさを攻められ、また出陣命令に背いたということも理由に、山中氏を筆頭にする甲賀衆のほとんどが、惣中を改易され知行を召し上げられるのである。そして秀吉は、新たな甲賀の拠点として、同年に甲賀の中心部、道路網の結節点に水口岡山城を築き中村一氏を入れた。本来の目的は、織豊系城郭の甲賀への進出にあったのではないであろうか。これまでの琵琶湖沿岸での築城方針から一点、内陸部での交通の要衝を押さえる位置への政策の方針転換がこの築城から読み取れる。後に、甲賀衆の責めが許されたのは、関ヶ原で豊臣軍が敗退した慶長5年(1600)のことである。「神君伊賀・甲賀」越えの功績を重んじたものと考えられる。彼らの多くは家康から直参や同心に取り立てられて、旧領屋敷地は個人に返された。しかし、知行そのものは天領とし水口城を築いたことは、やはり地域政策としては甲賀が重要な土地であったことを示している。

### 4. 甲賀郡の仮想敵とその画期

甲賀をめぐる仮想敵として、ふたつの時期があることがいわれている。これを前段としてのべた。その内の一つとして、甲賀焼き討ち伝説とともに信長の侵攻と存在が大きな位置を占めていたことを前提に、歴史的動向をとらえなが

ら織豊政権下での甲賀の状況を検討した。その内容は以下の通りであった。

足利義昭ともなった信長の上洛とそれともなう近江侵攻は、幕府方に反攻する者にとっては確かに脅威であり、これらに反攻した六角氏や浅井氏は戦鬪を伴った敵対行動に出た。特に六角氏はこれらの戦鬪に被官となっていた湖南から甲賀にかけての在地領主を利用し、一揆という形で反信長勢力を築こうとしていた。しかし、足利幕府の奉公衆という側面、路次警固の役も担っていた甲賀武士団へは、足利幕府も信長も蹂躪という形ではなく、恭順的な体制下への組み込めを目指していたようであった。結果として、野洲川や石部での局地的戦鬪はあったものの、甲賀郡全域が大規模な焼き討ちをあうようなことがなかったことがわかった。これらの画期は、織田政権に組み込まれていた時期、第Ⅲ期：永禄8年(1566)～天正9年(1581)である。ちなみに、天正9年は、伊勢・伊賀への信長の侵攻で、甲賀衆が大きな役割を担ったことは述べたとおりである。

これらの情勢不安による風聞は、自分たちの取り扱われ方や実際の軍事行動という形として目に見えるまでは、脅威・恐怖であったことはまちがいが無いであろう。それは、甲賀武士団だけではない。近江国の他の地域の武士団であってもそうである。もちろん近隣の伊賀国にとってもそうであったにちがいない。ここにこういう文書が知られている。ひとつは、永禄9年12月15日の日付がある荘内三家と呼ばれる伴同名中惣、山中同名惣、美濃部同名中惣で交わされた「三方以起請文申合条々」(『山中家所蔵文書』)起請文である。この時期は、9月12日に六角氏の観音寺が上洛途上の信長により攻められて落城し甲賀から伊賀へと落ち延びてきた直前に当たり、また、三好一族が勢力を盛り返し再び上洛する12月19日の直前にあたる。織田という北の敵、三好という南の敵に挟まれる可能性があったため惣中の意思統一の必要性に迫られていたと考えられる。しかし、永禄10年・11年にかけてのこの時点で、足利幕府と信長からのアプローチにより彼らは信長方になびいていくのである。さらに、年月日が切り取られ、甲賀中山家に伝わる甲賀との取り決め文書である「伊賀惣国人一揆提書(2)」についても、長年その年代を天文二十年から永禄十一年とし、仮想的を信長としてきたが、近年では永禄9年とし伊賀から見た仮想的を信長ではなく三好一族もしくは大和衆とするのがよいとされており、信長への脅威が実はさほど問題ではなくなりつつあったこととしてとらえられている。

さて、このような見方から考えると、信長の甲賀への脅威がほのめかされた始めた永禄8年段階に甲賀惣自治がこれらに対処するために急速な結束を固め直し、組織的な築城政策に踏み切ったとしても、焼き討ち伝説のある元亀元年(1570)までの間はわずか4年である。はたして、彼ら

は実際に何をどこまで行えたのであろうか。またどこまで何を行う必要性があったのであろうか、甚だ疑問が残るところである。

では、城の成立起源をどこに持ってくるのかということである。永禄8年以前の甲賀の仮想的は実は伊賀と同じように、大和から攻めてくる可能性のあった大和衆と三好一族であった。この時期をおおよそ、第Ⅱ期：天文元年(1532)～永禄8年(1581)としたい。

さらにそれ以前として、第Ⅰ期：文明元年(1469)～享禄4年(1531)甲賀武士の名をとどろかせた文明の乱で活躍した時期があげられる。甲賀の随所が戦乱に巻き込まれている記録があり、これらの位置づけはうなずけるところである。

ちなみに、第Ⅳ期：天正11年～文禄4年までが豊臣政権下に組み込まれた時期で仮想敵はない。

以上のように、甲賀の城の築城と歴史的背景を照らし合わせると、実は最も実践的に地域内防衛の必要性にせまられたのは第Ⅰ期であり、次がⅡ期と考えてよいであろう。

## 5. おわりに

既述のとおり、甲賀武士団における最も基本であり初期の彼らにとっての最大の使命は地域の路次を警固することであった。このことは、武士団の多くが奉公衆であることからわかる。近江と伊賀の国境を守る。近江と伊賀を繋ぐ基幹道や入口となる関を守る。これらを安全を確保することこそがかれらの使命であったと考えるのが良いであろう。守るべき道と川、その結果としてそれらを含む確保すべき戦略的地域を守ることこそがかれらの自治の本質であったと考える。そういう意味においては、甲賀郡の仮想的は、その時々自らの地域を侵犯しそうな気配を見せた動乱であり他国の者達である。歴史的事象でいけば、それは応仁の乱であり、大和衆であり、三好一族であり、織田信長であり、伊賀惣国一揆となる。しかし、前提として道と地域との安全を確保する目的とする行為が最優先であるならば、それらは単にひとつの要因だけであり侵略行為に備えた突発的なものとして直接的な関わりは薄いかもしれない。むしろ、いかにして連合して地域を確保していくかという彼らの理想論の上に成り立った自治の在り方こそが、地域監視や道路監視の意味合い深い城を作らせているのではないであろうか。さらに、その結果が逆に、甲賀武士団として独立した組織的イメージを作り上げているとも考えられる。実は城も自治組織のひとつの形の現れであり、実は戦いとほど遠い物であり、違う必要性から生まれ営まれた閉じら世界とも考えられる。

城の築城に必ずしも事件が必要ということでもないであろう。理念概念上、城を必要としている仮想敵が想像できるならば、その形が生まれる可能性があるのではないであろうか。つまり、役に立つかどうかは別として、意識の中

では自分たちの地域を守るため、職務に忠実にあるために、備えあれば憂いなしという発想である。おそらくは、戦闘などは遠く無縁で一度も使われること無いままに、築かれ廃されていったものも数多くあるのではないか。

もちろん、状況の中での地域の動揺や不安はあったであろう。そのことは、より地域惣中の結束を固めていることでもわかる。ここでは検討してきたとおり、一つの要因である織田信長の近江による甲賀への侵攻が、石部を中心とした三雲までの思った以上に小規模なものであり、それ以外の地域では、むしろ早い段階から信長に対して恭順の意を示している武将も多いという結果と甲賀焼き討ちがその後の過大広告である可能性を考えると、甲賀の数多い築城がすべて信長に進行したとはとうてい考えがたい。また、彼らにとっては守護六角氏といえども、地域武士団として利害関係から与力するだけであり、そういう意味においては、信長や秀吉に対して後に甲賀衆として軍団に組み込まれていることもその状況をよく示しているであろう。甲賀武士団と信長との対立は、後の世に大きく膨らまされた幻想にすぎないかもしれないと思うばかりである。

もちろん、より強固に改変した武士もいたことであろう。城もあったことであろうが、情勢からはその必要性は圧倒的に無い。むしろ政治的、状況的な判断でそれらの危険度は回避できていったのである。現に彼ら甲賀武士団は最終的に信長方につくことで「甲賀衆」としての名を残し、豊臣政権を経て徳川政権へと生き延びていることで証明されている。そして、現在まで、里山として地域の中で破棄放棄されずに城が伝え残されているというところでもしっかりとその意識があらわされていると思う。甲賀の城に山城が少なく、複雑な構造を持ったものも少なく、大字ごとに多数の城が存在していることは、これらに起因しているのではないかと考えるところである。

(きど まさゆき：調査整理課)

## 註

- (1) 『滋賀県中世城館調査報告』2—甲賀郡— 滋賀県教育委員会 1984
- (2) 木戸雅寿「甲賀の城のネットワーク」『紀要』19号 (財) 滋賀県文化財保護協会 2007
- (3) 木戸雅寿「織田信長と大和」『織豊系城郭の成立と大和』大和中世考古学研究会・織豊期城郭研究会 2006
- (4) 奥野高広校注『信長公記』角川書店 1969
- (5) 西田弘「長寿寺塔跡と捻見寺」『滋賀考古学論叢』第2集
- (6) 夏見城現地説明会資料 (財) 滋賀県文化財保護協会 2007
- (7) 木戸雅寿・小島孝修 ほ場整備関係(経営体育成基盤整備) 遺跡発掘調査報告書33-2『植城遺跡』滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 2006
- (8) 細川修平・堀真人 近畿自動車道名古屋神戸線建設に伴う発掘調査報告書『竜法師城遺跡』・柑子塩野線緊急地方道路整備事

業に伴う発掘調査報告書『竜法師城遺跡・池ノ尻遺跡』滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 2006

- (9) 木戸雅寿・北原治・細川修平 近畿自動車道名古屋神戸線建設に伴う発掘調査報告書『高野城遺跡』滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 2007
- (10) 用田政晴・木戸雅寿『上野城跡発掘調査報告書』甲賀町教育委員会 1989
- (11) 『小川城発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ』信楽町文化財報告書第1・2集 信楽町教育委員会 1996・1998
- (12) 稲本紀昭「室町・戦国の伊賀」『国立歴史民俗博物館研究報告』第17集 国立歴史民俗博物館 1988  
久保文武『伊賀史叢書考』同朋舎 1986

## 参考文献

『甲賀郡史』甲賀郡教育会 1926



編集後記

前号の紀要より表紙デザインの刷新をはかりました。書架に並ぶことを想定し、各号ごとにテーマカラーを定めて発刊を重ねていきたいと思えます。

本書が文化財の保護のため、広く活用されることを心より願っております。

(編集担当 M. N.)

平成20年（2008年）3月

**紀 要 第21号**

編集・発行 財団法人滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2

Tel. 077-548-9780(代)

<http://www.shiga-bunkazai.jp/>

E-mail: [mail@shiga-bunkazai.jp](mailto:mail@shiga-bunkazai.jp)

印刷・製本 三星商事印刷株式会社